

# 知的活動と生涯現役に関する研究ノート（1）

Study Note on the relation to Aging and Intellectual Activities

窪田 八洲洋\*

Yasuhiro KUBOTA

## 抄 録

本研究ノートの目的は、古今東西を通して、知的活動が最後まで衰えなかった「生涯現役」の諸先輩の履歴を分析し、少子高齢社会における「介護・医療制度」のあり方に関する提言をすることにある。一例として「予防介護」をさらに展開・強化する施策のひとつとして、中高年層が生涯にわたって「社会の一員としていきいき生きる」手段として「若者と同じ学問の場で再び学ぶ」ための学費助成も考慮した受け入れシステムの構築について提案する。ただし、本報は、現状分析と問題の提起にとどめ、具体的な提案については第2報で行う予定である。

## 1. はじめに（研究の背景）

本研究を始めようとした直接の動機は、いわゆる高齢者の立場から、現在の少子高齢化社会における「介護・医療」行政のあり方について素朴な疑問を抱いたからである。

現在の施策は、「高齢者イコール介護を要するもの、高額医療費の受給者」という視点に立って、単に“生活年齢”のみで「労働人口、前期高齢者、後期高齢者」と色分けし、本人の意思とは全く無関係に強制的に介護保険に加入させ、それに伴う介護保険事業を創出し、その結果、「施設における高齢者虐待」や「コムスン介護報酬不正請求事件」など、介護保険料にまつわる官・業界の不正の温床を醸成してきた側面があることは否めない。

さらに、平成20年4月からは、今まで国民健康保険、被用者保険等の被保険者、被扶養者であった後期高齢者をそれぞれの保険から脱退させ、基本的には受益者負担の原則に則り「後期高齢者医療制度」に強制的に加入させて新たな独立財源を創設し、後期高齢者の互助で医療費を負担させる制度が発足する。しかし、この新しい制度を維持・管理するために、新たな公務員を増員し、新たな財政支出をすることになる。さらに将来、また、介護保険の二の舞を生み出す温床を醸成するのではないかと危惧せざるを得ない。

確かに、現在、日本人の平均寿命は、平成18年簡易生命表によれば、男：79.00年、女：85.81年と世

---

\* 関西国際大学人間科学部

界一の長寿国ではあるが、この中には、施設や自宅で、あるいは病院で寝たきりで何年も生き続けるといふ、本人は勿論のこと、家族や社会にとってもかなりの負担になっている人々がいることは否めない。しかし、私達の周りには、多くの元気な高齢者が見受けられる。特に、後期高齢者といわれる、現在75歳以上は、青少年期に戦争による「死の恐怖」と毎日対峙し、戦後、この恐怖から脱却しても、待ち受けていたものは、食うや食わずの飢餓状態であった。これにも耐え忍びつつ、高度成長の牽引車として、只ひたすらに生き続けてきたことにより「生きるとは何か、幸せとはなにか。」それは、物欲的な豊かさではなく「自力で、一日一日を充実して生きていく達成感・満足感が、いきいきと生きる原動力である」ことを、「生活の知恵」として体得してきた世代である。従って、これらの世代は、敢えて極論すれば、なまじっか過剰な介護・医療をせずに突き放したほうが、生得的に獲得した往年の活力を呼び覚まし、人間としての尊厳死を迎えることが出来るのではないかと推量する。

これらを裏付けるものとして、昨今、マスコミ等で紹介されている「百歳現役」の方々をはじめ、年を重ねてもなお、自律的に新たな挑戦を目指す多くの高齢者の生きざまを仄聞することが出来る。例えば、NHKの「ラジオ深夜便：心の時代」で紹介されたエピソード『かつてピアニストであった女性が80歳で軽い認知症にかかり、かつ車椅子の生活になったとき、当初、娘さんが入浴を含め身の回りの世話をしていた。しかし、あるとき、かつての母の養育態度を思い出し、できるだけ自力できるように突き放していったところ、90歳になってピアノリサイタルを開くまでに回復した』ことなどは、周囲の人々に希望と勇気を与えるものである。また、身近な例として、高校教員を定年退職し自宅療養後、本学に勤務するようになった某職員は、末期がんで後1ヶ月の命と宣告され、退院を余儀なくされたが、「自ら生きる気力」を振り絞って東奔西走し、あらゆる努力を重ねたところ、すでに5年を経過した現在もなお知的活動を続けている。さらに古くは、89才で没するまで創作活動を続けた葛飾北斎、70歳から85歳没まで著述に専念した貝原益軒、106歳で没する直前まで研究所に通い、学術論文を毎年1本以上発表し続けた伊藤博士、97歳にして今なお現役として活躍中の日野原医師、96歳現役で活躍中の新藤映画監督など、いわゆる百歳現役は、まず健康であり、最後まで知的活動が衰えなかったのである。

これら事例のように、知的活動が、いきいき生きるいわゆる「生涯現役」の主要因なのかは、今後の研究に待たねばならない。しかし、現在の「介護・医療制度」は、ある意味では「高齢者イコール介護ありき」というマイナス思考の施策によって、高齢者の自律性を阻害し、結果として介護者や病人をつくっているという側面は否めない。

本来は、現在の介護・医療費の肥大化を図る前に、高齢者の豊富な知識や経験、技能等は国の宝というプラス思考で、高齢者が「いきいき生きる」社会環境を整備するために税金を投入することが先決であろう。すなわち、高齢者が健康で、豊富な知識や経験、技能等を活かし、生涯を通じて様々な分野でいきいきと活躍できる「生涯現役社会」を実現することによって、高齢者は人間性を回復し、同時に介護費や医療費の削減はもとより、家族や地域社会のお荷物的存在<sup>2</sup>に、地域社会の一員として応分の役割を担ってもらうことのほうが極めて有益であろう。ちなみに、関西国際大学では、平成18年4月からシニア特別選考学生を受け入れているが、彼らは、再び学ぶことによって「心身ともに若返り、若者と一緒に海外語学研修に行く気力と体力が出てきた」あるいは「若者と同じ学びの場で、学問としての知的刺激を受けることによって『いきいきしてきれいになった』と身内からいわれている」など「再び学びいきいき生きている」体験等が紹介された。<sup>1</sup>

## 2. 研究の目的

（1）本研究の第1の目的は、知的活動と生涯現役「生きることは学ぶこと、学ぶことは生きること」の相関関係を、古今東西の史実ならびに現在活躍中の諸先輩の生き様を分析し、検証することにある。

（2）本研究の第2の目的は、上記（1）の仮説が立証されれば、

①まず、将来の要介護者・要高額医療費受給者を減少させるため、現在の中高年、場合によっては若年層をも対象にしたグローバルな施策を提案することにある。具体的には「中高年受け入れモデル」開発のための基礎資料を得ることにある。

②次に、既に社会が抱えている要介護者・要高額医療費受給者が自律し、出来れば社会復帰をも可能とする施策を模索し提案することにある。

## 3. 調査の方法

（1）調査対象は、学者（哲学・文学・社会・科学等）、技術者、芸術家など一般人

（2）調査要領①：有史以来現在まで、著名な人物の業績を、主としてインターネットにより検索し、時系列的に整理して、知的活動と生涯現役との関係を分析する。

（3）調査要領②：主として厚生労働省のデータベースにより、日本の高齢化社会の実態を、介護・医療の観点から整理・分析し、調査①により得られる「知的活動と生涯現役との関係」則を、要介護者・要高額医療費受給者への適用の可能性、出来れば社会復帰への施策になり得るかどうかの検証を行う。

## 4. 調査結果

### 1) 高齢化社会の現状

高齢化社会の現状と将来像については「平成19年版高齢社会白書<sup>2</sup>」にまとめられているので、ここでは「介護・医療」という視点から、主として「厚生労働省統計一覧<sup>3</sup>」のデータベースをもとに図表を作成し、これらを基に概観する。

（1）65歳以上の高齢者の人口に占める割合（表1）

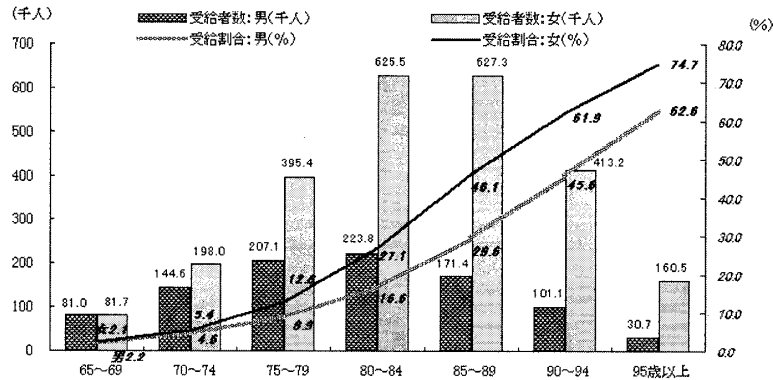
高齢者人口（平成18年10月現在）			
（単位千人）	男女合計	男	女
65歳以上	26,604	11,310	15,294
うち 65～74歳	14,438	6,776	7,662
うち 75歳以上	12,166	4,534	7,632
総人口に占める割合（％）			
65歳以上	20.82	18.14	23.37
うち 65～74歳	11.30	10.87	11.71
うち 75歳以上	9.52	7.27	11.66

知的活動と生涯現役に関する研究ノート（1）

65歳以上の総人口に占める割合は、男女合計で20.32%である（表1）

うち、65～74歳（いわゆる前期高齢者）が、65歳以上人口の約54%を占めている。

（2）性・年齢階級別にみた65歳以上人口に占める介護受給者（平成18年11月：図1）



注：人口は、総務省統計局「平成18年10月1日現在推計人口(総人口)」を使用した。

性・年齢階級別にみた65歳以上人口に占める介護受給者の割合（表2）

(%)	65～69	70～74	75～79	80～84	85～89	90～94	95以上
男	2.2	4.6	8.9	16.6	29.6	45.6	62.6
女	2.1	5.4	12.8	27.1	46.1	61.9	74.7

65歳以上の当該年齢人口に占める介護受給者の割合は、男女合わせて、74歳までは4～10%で推移するが、75～79歳をターニングポイントとして増勢に転じ、40%以上が受給するようになる年齢階層は、女性では「85～89」と、男性の「90～94」に較べて、早く受給者になっている。なお、「70～74歳」以降の全ての階級において、女性の受給割合が男性を上回っており、90歳以上の女性では、3人に2人が何らかの介護を受けていることになる。しかし、絶対数そのものは約41万人とピーク時（期せずして平均寿命の85歳）の約66%に減少している。（図1，表2）。

（3）介護サービス受給者数、要介護状態区分・サービス種類別（表3）

平成19年9月審査分

（単位：千人）

	総数	経過的要介護	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
総数	2,929.7	16.4	671.2	691.7	618.0	512.5	417.4
居宅サービス	1,972.0	15.6	593.1	554.9	398.8	248.5	161.0
居宅介護支援	1,815.2	15.1	559.2	518.6	362.0	219.3	140.9
地域密着型サービス	187.5	0.0	37.6	49.5	54.5	32.1	13.8
施設サービス	836.6	0.0	45.7	101.8	186.4	248.5	251.6

注：総数には、月の途中で要介護から要支援に変更となった者を含む。

要介護状態区分・サービス種類別割合（%）

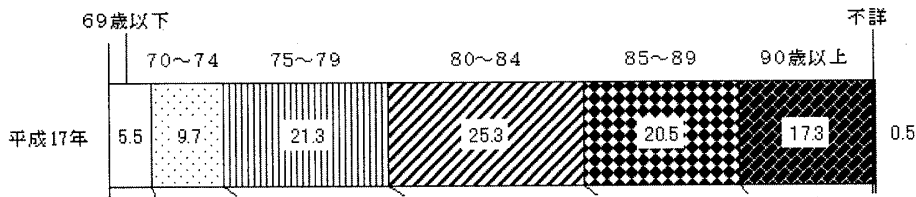
総数	100.00%	0.56%	22.91%	23.61%	21.09%	17.49%	14.25%
居宅サービス	67.31%	0.79%	30.08%	28.14%	20.22%	12.60%	8.16%
居宅介護支援	61.96%	0.83%	30.81%	28.57%	19.94%	12.08%	7.76%
地域密着型サービス	6.40%	0.00%	20.05%	26.40%	29.07%	17.12%	7.36%
施設サービス	28.56%	0.00%	5.46%	12.17%	22.28%	29.70%	30.07%

要介護に認定された65歳以上の高齢者の約3分の2は、居宅介護支援サービスを受け、施設サービスは、3分の1にとどまっている。

年齢・性別毎の要介護状態区分・サービス種類の詳細データはないが、「排泄がほとんど出来ない要介護4以上」の受給者は、90歳以上を含めた総受給者の約17%にとどまっている。これが多いと見るか少ないと見るかは見解の分かれるところである。

（4）有料老人ホームの入居者の状況

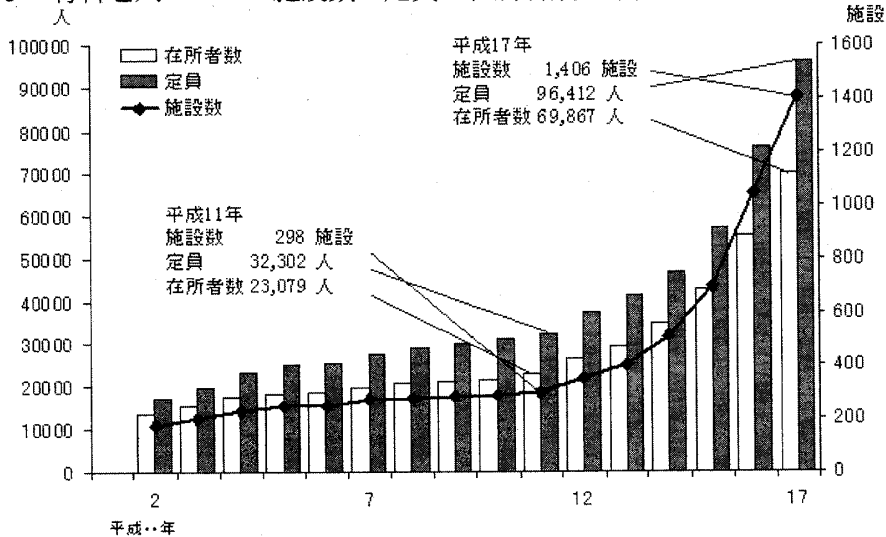
図2 入居者の年齢階級別構成割合



- ①入居者の年齢構成をみると、「74歳以下」でも「15.2%」が入居し「90歳以上」の「17.3%」と同じオーダーになっている。なお性別でみると「90歳以上」では、男が「15.1%」、女は「18.3%」になっている。
- ②入居者数は、平成17年で約72%にとどまっている。なお、平成2年以降現在まで、各年とも定員を下回っている。（図3）

前述の65歳以上の高齢者の約3分の2は、居宅介護支援サービスを受け、施設サービスは、3分の1にとどまっていることと関連して、有料老人ホームのあり方について検討する必要がある。

図3 有料老人ホームの施設数・定員・在所者数の年次推移（各年10月1日現在）



以上、「介護」の視点から、日本における高齢者社会の現状を概観してきたが、次に、古今東西、「生涯現役」を通じた、あるいは現在進行形の人々を概観してみよう。

2) 知的活動と生涯現役について

(1) 歴史上の人物の知的活動の概要（表4）

古代ギリシャの科学者「タレス：78歳」から現代の「松本清張：83歳」にいたるまで、その知的活動

知的活動と生涯現役に関する研究ノート（1）

（職業）と生年・没年をまとめたものが「表4」である。

各国、各年代の平均寿命に関する資料は乏しいが、わが国の平均寿命が20歳を超えたのは江戸時代中期以降であるが、これは新生児の死亡率が高いことによるもので、昭和30年に深川から発掘された江戸時代の人骨200体から、当時の死亡年齢が40～45歳と推定されている。<sup>2</sup> これらのデータから世界的にも同じ傾向があったと類推すると、古代ギリシャの科学者タレス（78歳）、ニュートン（85歳）、貝原益軒（85歳）、葛飾北斎（89歳）、近代になって量子論のプランク（89歳）、原子構造モデル論の長岡半太郎（85歳）、赤痢菌の志賀潔（87歳）等々、いずれも当時の平均寿命の2倍前後は存命し、しかもその知的活動は、死の直前まで持続していたことである。

葛飾北斎は、自ら「画狂老人」と称しているように、その青年のような情熱が衰えることは全くなかった。一説によると、彼の作とされる絵は3万5千点にも上るといわれている。ちなみに、75歳のときに「富嶽百景」を刊行しているが、その作品の後書きに、「70歳までに描いたものはとるに足らぬものである。73歳でやっと生き物の骨格や草木の生まれを知った。80歳になればますます腕は上達し、90歳で奥義を極め、100歳で神技といわれるであろう」と記している。このようなことは、歴史上の人物にとどまらず、現存あるいは平成年代に入って没した先人にも同じことがいえる。

表4. 生涯現役の一覧

氏名	職業	生年	没年	年齢	
タレス	科学者	BC624	BC546	78	古代ギリシャの自然哲学の祖
ピタゴラス	科学者	BC560	BC480	80	自然現象の数理的研究の概念を普及
アルキメデス	科学者	BC287	BC212	75	アレクサンドリア時代の科学者・技術者
コペルニクス	科学者	1473.00.00	1543.00.00	70	地動説の提唱者
ガレリオ	科学者	1564.00.00	1642.00.00	78	天文学・動力学
吉田 光由	学者	1598.00.00	1673.10.05	75	塵劫記：当時の生活に必要な算術全般をほぼ網羅。晩年に失明。和算家
貝原 益軒	学者	1630.00.00	1714.10.05	85	70歳で役を退き著述業に専念。著書は60部270余巻に及ぶ。詳細は別紙。
ニュートン	科学者	1642.00.00	1727.00.00	85	全自然の統一的力学体系を樹立
杉田 玄白	医者	1733.10.23	1817.06.01	80	生母は出産の際に死去。国内初の人体解剖は蘭書の正確性を証明。蘭学医
伊能 忠敬	測量家	1745.02.11	1818.05.17	73	6歳のとき母と死別。56歳の時、第1次測量を開始。商人
ゲーテ	詩人	1749.08.28	1832.03.22	83	ドイツの詩人、劇作家、小説家、科学者、哲学者、政治家。
葛飾 北斎	画家	1760.10.31	1849.05.10	89	73歳でやっと生き物の骨格や草木の生まれを知った。詳細は別紙。
二宮 尊徳	思想家	1787.09.04	1856.11.17	69	14歳で父が死去、2年後には母も亡くなり、尊徳は伯父の家に預けられた。伯父の家で農業に励む
ファラデー	科学者	1791.00.00	1867.00.00	76	電気・磁気の研究
メンデレフ	科学者	1834.00.00	1907.00.00	73	元素の周期律
レントゲン	科学者	1845.00.00	1923.00.00	78	エックス線の発見
北里柴三郎	科学者	1852.00.00	1931.00.00	79	破傷風菌の研究
プランク	科学者	1858.00.00	1947.00.00	89	量子論
長岡半太郎	科学者	1865.00.00	1950.00.00	85	原子構造のモデル
モーガン	科学者	1866.00.00	1945.00.00	79	遺伝子説の確立
幸田 露伴	作家	1867.08.20	1947.07.30	80	
志賀 潔	科学者	1870.00.00	1957.00.00	87	赤痢菌の研究
野口 英世	科学者	1876.00.00	1928.00.00	52	梅毒病原の研究
アインシュタイン	科学者	1879.00.00	1955.00.00	76	相対性理論
野上弥生子	作家	1885.05.06	1985.03.30	100	100歳で逝去するまで現役作家
谷崎潤一郎	作家	1886.07.24	1965.07.30	79	
徳川 夢声	作家	1894.04.13	1971.08.01	77	講談師、弁士、脚本家
松下幸之助	実業家	1894.11.27	1989.04.27	95	5歳のとき、父が米相場に失敗し破産
近藤 康男	学者	1899.01.01	2005.11.12	107	100歳を超え、老いと闘いながら最期まで著作を諦めず106歳まで生きる気力を貫き徹された。詳細は別紙。
横溝 正史	作家	1902.05.25	1981.12.30	79	
樋口源一郎	映画監督	1906.00.00	2006.2.23	99	
湯川 秀樹	科学者	1907.00.00	1981.00.00	74	中間子理論
松本 清張	作家	1909.12.21	1992.08.04	83	

（2）平成年代に没したあるいは存命する人物の知的活動の概要（表5）

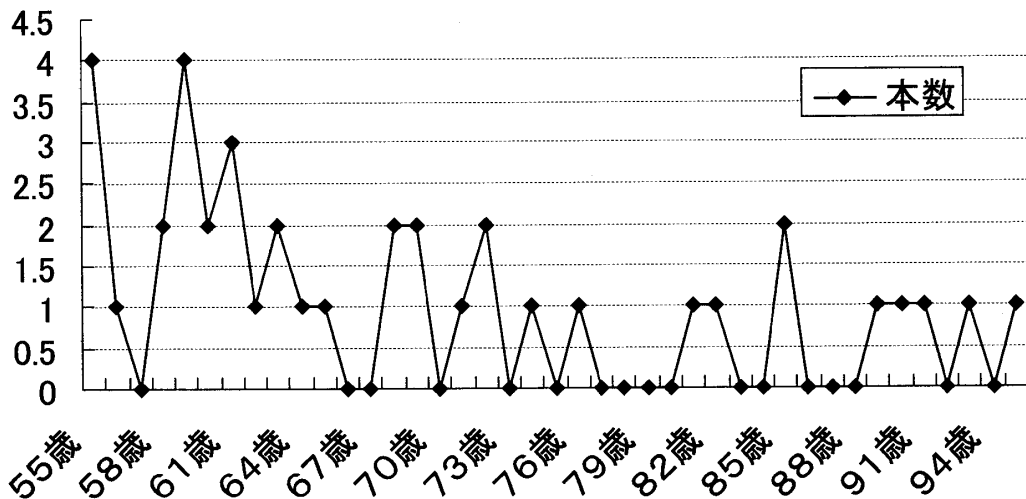
表5. 生涯現役の一覧（2）

氏名	職業	生年	没年	年齢	
ワトソン	科学者	1928.00.00		79～	DNAの二重らせん構造解明
日野原重明	医者	1911.11.04		96～	内科医、
新藤兼人	映画監督	1912.04.22		95～	14歳のとき父が借金の連帯保証人になったことで破産。脚本家、映画監督
深緑夏代	歌手	1921.00.00		86～	シャンソン歌手
朝倉 撰	舞台美術	1922.07.16		85～	彫刻家：朝倉文夫の長女。舞台美術家、劇場コンサルタント。創造力の源は「ものを見る目」と「記憶」
佐藤安太	実業家	1924.03.20		83～	2007/4：山形大学院理工学研究科博士課程に入学。タカラトミー創業者
宮城まり子	歌手	1927.03.21		80～	ねむの木学園長、女優、映画監督・福祉事業家
曾野 綾子	作家	1931.09.17		76～	

平成時代に入って没した百歳の映画作家：樋口源一郎は、科学映画の世界に独自のコスモロジーを展開し、100歳近くまで旺盛な創作活動を続けていた。（図4）

樋口源一郎は、生物進化に関する未知見を、微速度撮影で解明する映画研究で知られ、細胞性粘菌の細胞分化のメカニズムを追及した「映画論文」は、世界的な評価を得ている。代表作に、「長崎の子（1949）」、「声なきたたかいまつけむしの一生（1955）」、「女王蜂の神秘（1962）」、「弘法大師 空海（1988）」、「真正粘菌の生活史（1997）」などがある。

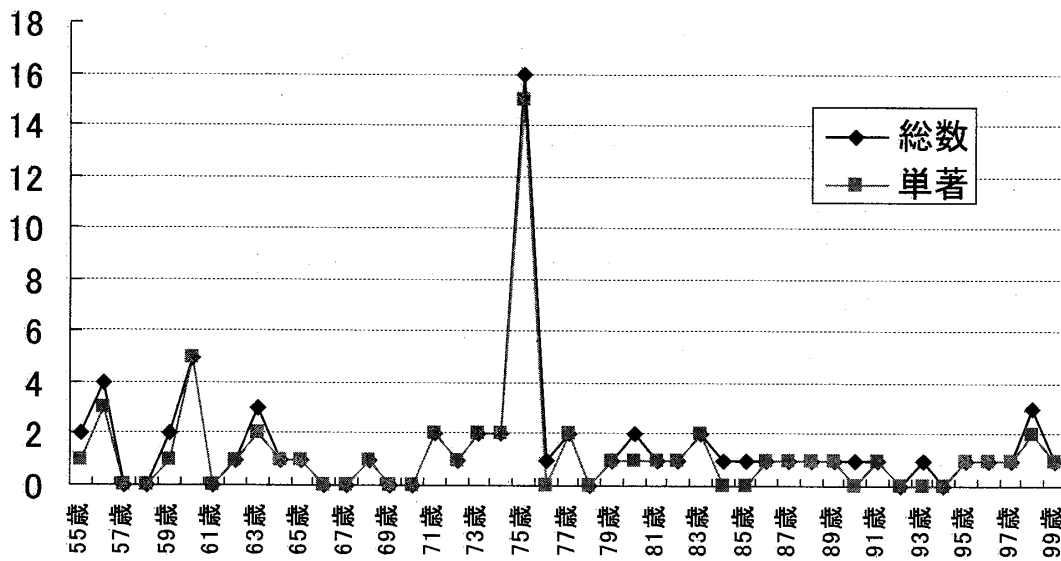
図4. 樋口源一郎、映画制作件数の推移



また、農業経済学者の近藤康男博士（106歳）は、101歳にしてなお現役の学者として、毎日、研究室に通い読書と著述で暮らし、1年に1冊は学術論文を刊行している。その著作の推移をたどったのが図5である。これによれば、古希はいまどき珍しくはないが、75～76歳にして単著を15巻も刊行する驚異的な知的活動のすさまじさである。これが成り立っている条件の一つに健康があるが、博士が掲げた条件をここに紹介しよう。

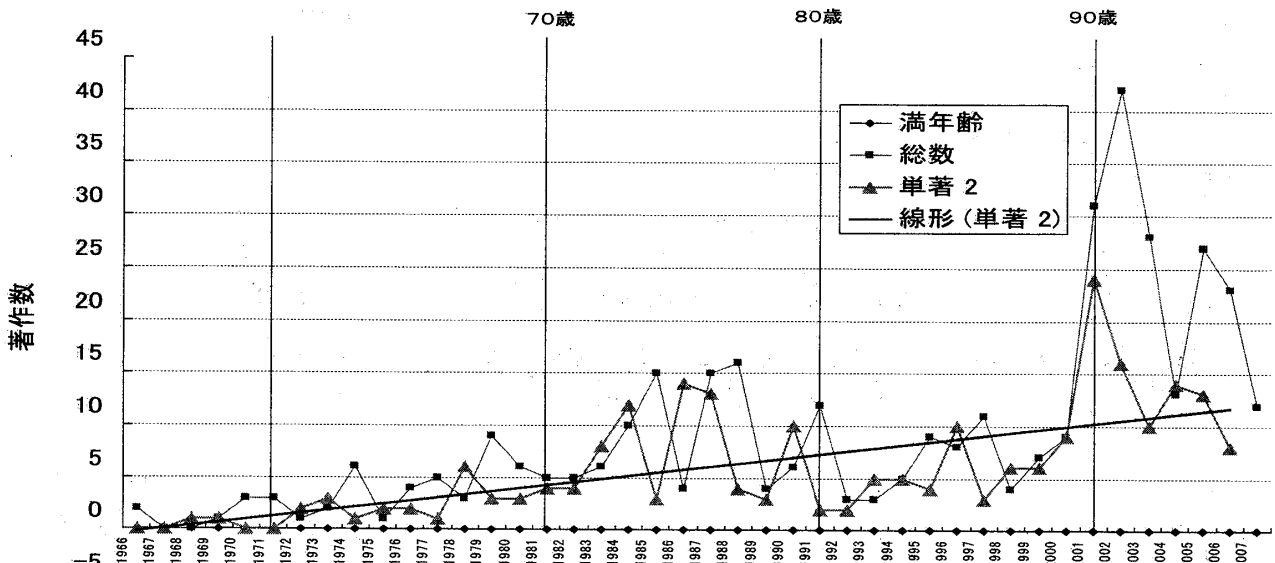
- 一. 日常生活を自分で行い、家庭菜園で作物を育てること。
- 二. 毎日、仕事場（研究室）に徒歩で通勤すること。
- 三. 組織の一員として社会活動に参加すること。
- 四. 目標を立て、二、三年で成果が現れたものを著述すること。

図5. 近藤康男: 著書の推移



さらに、いまなお現役の医者として活躍中の日野原重明医師（96歳）は、医療の傍ら著述や講演に東奔西走され、そのスケジュールはすでに1、2年先まで埋まっている超多忙の日々をおくっておられる。ちなみに、その著作の単著のみをとらえても、年々右上がりの刊行、2006年には12冊に達している（図6）

図6. 日野原重明の著作の推移



また、96歳にして、いまなお現役の映画監督兼脚本家の新藤兼人は、長年の映画制作に対して、1997年に文化功労者、2002年に文化勲章を受章している。また、映画を通して平和を訴え続けた功績により、2005年に谷本清平和賞を受賞している。

あるいは、1950年代からずっと話題作を手がけてきた舞台美術の第一人者、朝倉撰（85歳）は、彫刻家朝倉文夫の長女として生まれ、19歳のとき、第4回新文展に入選。以来、日本画、舞台美術の仕事を始め、前衛劇からオペラまで幅広く活躍。最近では、イラストレーター、装丁家としても活躍するなど、老いてますます盛ん「生涯現役」である。

以上の生涯現役を貫いた、学者（哲学・文学・社会・科学等）、技術者、芸術家など以外にも、市井



に埋もれている一般人の「生涯現役」を発掘する狙いで、現在、NHKが放映中の「百歳バンザイ」や、インターネットで連載中の日経ビジネスオンライン「生涯現役という生き方」など、多くの人々が健康で、いきいきと生きている姿を拝見して、改めて「60、70は漬垂れ小僧」という思いを深めた次第である。

## 5. まとめ（考察）

いままで概観してきた諸賢は、いずれも死の直前まで知的活動を続けている、というよりも、むしろ「老いてますます盛ん」というのがその実相であろう。

これを可能にするものは、健康、その健康を維持する基盤となるものは、北斎や樋口のように取材という目的で、「長年にわたって歩くこと」であったこと、また、近藤博士のように通勤という機会をとらえて意図的に「長年にわたって歩くこと」を心がけ、さらに日曜菜園による運動など、いずれも「長期にわたって歩く」生活習慣が、これらの知的活動を支えていたことが容易に類推できる。さらに、食生活もかかわっていると思われるが、いまは手元に資料がないので、その関連性について結論づけることができない。いづれにしても、知的活動が、要介護や高額医療費の支出を削減あるいは遅延させることに有意に働く可能性があるので、中高年層に対しては、早期に「知的活動」の習慣化、その手段の一つとして「再び学ぶ」ことをすすめることが肝要ではないか。

また不幸にして、すでに要介護や高額医療費受給者になった人々に対しても、介護の過程で「知的活動のリハビリ化」を図り、人間としての尊厳を取り戻す方向に持っていくことが望まれる。これらの具体的な施策については、第2報で提案する予定である。

## 引用・参考文献

- 1 現代GPプロジェクト・シンポジウム「21世紀はシニアの時代～再び学び いきいき生きる～」  
2007.10.19 関西国際大学4号館101教室
- 2 厚生労働省「平成19年版：高齢社会白書」  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2007/gaiyou/19indexg.html>
- 3 厚生労働省「厚生労働省統計一覧」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/index.html>

Abstract

The purpose of this study Note was to research the relationships between Aging and Intellectual-Activities.

First of all, I was to investigate the relationships between Aging and Intellectual-Activities of the famous successive persons from ancient Greece to today in the world.

The results of this investigated would seem that continual intellectual-works in aging was activated Life and was not needs the support of others until at the moment of death.

Therefore, something of the National Budget for supports of aging persons have to use on the intellectual-works in aging. I shall have developed the support system on the intellectual-works for aging persons that will have been being used the senior's "TERAKOYA" we named.